

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） ジョン・パトリック・ポーター 印

学位申請者 船戸 雅也

論文名 「人たる道」と心学

【審査結果】

氏の博士学位請求論文「「人たる道」と心学」について、論文審査と口述による最終試験（公開審査）の結果、審査委員会は、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、最終試験は、2024年1月10日10時から約2時間かけて、本部管理棟中会議室において対面で実施された。審査委員会は、ジョン・パトリック・ポーター（主査）、友常勉（主任指導教員）、佐藤正広、野平宗弘、宇野田尚哉（大阪大学教授）の5名から構成された。

【論文の構成】

本論文の構成は以下の通りである。

序論

第1章 石田梅岩の思想と宋明心学

1. はじめに
2. 梅岩における心性論
3. 梅岩における世界認識論
4. 梅岩学における「家」の永続と「通俗道德」
5. おわりに

第2章 伊藤仁斎の「道」と石田梅岩の「人たる道」

1. 問題の所在
2. 梅岩における仁斎への反発
3. 仁斎の「道」への接近

4. 梅岩における超越的本体論と「人たる道」

5. おわりに

第3章 石門心学における『論語』解釈

1. 問題の所在

2. 石田梅岩『都鄙問答』における「仁」と「克己復礼」

3. 手島堵庵『為学玉箒』における「克己復礼」

4. 西川晩翠『心学道話』における「仁」と「克己復礼」

5. 石門心学における「克己復礼」解釈にみる平易化の意義

第4章 西川晩翠における「人の道」と石門心学の連続性

1. はじめに

2. 石門心学と西川晩翠

3. 西川晩翠『心学道話』における「人の道」

4. 西川晩翠『心学道話』における心性論

5. 石門心学における超越的本体論の展開－「天」と「本心」の連関

6. おわりに

第5章 西川晩翠における死生論と救済

1. 問題の所在

2. 中沢道二の死生論

3. 西川晩翠の死生論と救済

4. 晩翠の推進力と限界－衰退期の石門心学

5. 石門心学の限界と可能性

第6章 心学と「人の道」

1. はじめに

2. 「心学」における石門心学

3. 心学と「国民的宗教」

4. 「人の道」と「通俗道德」

結語

付録 西川晩翠『心学道話』翻刻

1. 解題

2. 西川晩翠『心学道話』其壱

3. 西川晩翠『心学道話』其貳

参考文献

【論文の概要】

本論文は、近世日本における「道」の探求を志した石田梅岩の思想と、その門弟たちが継承した「石門心学」を考察するものである。石田梅岩は京都市中で町人、とりわけ商人に向けて「人たる道」を説き、その門弟たちは布教活動の範囲を拡大し、農村へ、また武士階級に向けて「道」を教説した。本論文はその思想的営為が「人の道」の教説化および心学の「日本化」の過程であることを論じるものである。

そのような目的にもとづいて、第1章では、石田梅岩の思想が宋明心学との連関から検討される。第2章では、石田梅岩における伊藤仁斎の影響とそこからの差異化がどのように図られたかが検討される。第3章では、梅岩とその門弟たちによって、『論語』の克己復礼章がどのように解釈されたのか検討される。転じて第4章では、幕末に東日本を遊説した心学者、西川晩翠の『心学道話』における心性論が検討され、梅岩から堵庵、中沢道二といった弟子たちによって「人の道」がどのように展開されていったかが論じられる。第5章では、晩翠『心学道話』にみられる死生論と救済の思想を論じることで、宗教観念と言う観点から心学が検討される。そして、終章の第6章では心学を「人たる道」の経路として位置付け、近世日本における宗教観、道德規範について概観している。付録として、函館においてアイヌ民族を対象に道話講義をおこなった西川晩翠について、これまでテキストの解釈が共有されてこなかった西川の手録本『心学道話』の翻刻が付されている。

中国思想において、「心即理」の立場をとった陸象山、それを継承した王陽明など、致良知と知行合一を説いた陸王学の心学を嚆矢とし、近世日本の藤原惺窩、林羅山などの東アジアの心学の系譜に対して、石田梅岩は、農家に生まれ商家で奉公した経験を基に、元禄期以降の町人社会の到来に対応した心学の代表者として位置付けられる。梅岩は、30代の思想的模索のなかで、小栗了雲の朱子学的性理学、禪的かつ老荘的悟境の教えを介して、「開悟」の経験を得ることでその思想的転回を果たした。「性は目なしにてこそあれ」「我なし」などの成句によって語られる石門心学は、「開悟」の超越的心理的契機を秘訣としながら、四書五経の儒学の経典、太極図説、近思録、性理字義、さらに老荘のテキストを

重要書目として読み解くことをめざした。その方法論は厳密で実証的な考証学ではなく、さらに座禅や観法といった形式的実践を取り入れるのでもなく、主に商家や町人・平人身分の人びとが体験する日常生活の事例に即して反省し実践することに視座を据え、その生活の営みそのものを修行とするものであった。『日本思想大系 石門心学』における柴田實の解説で補いながら概説すれば、朱子学的な性理学において、原理としての理に対して、性は社会性と身体性の契機をなし、そのエージェントとして「心」がある。しかし梅岩は「性を知る」と「心を知る」ことを、静・動の区別、原理的には理・気の相異に基づいて理解しながらも、本来同一のものとして、パラレルに用いている。性は天地を貫く原理である理と一つであり、常に善であるが、心は気としての形に属し、私心私欲に覆われることがある。心は形をもたないがゆえに、「心は無心」である。だがその現象形態は常に個別特殊的な「形」を持つ。かくして「形による心」の成句が参照される。個別性・特殊性における「形」として顕現する「心」は、普遍としての性と天に究極的には規定されている。そしてこの論理が、近世身分秩序と職分によって規定された個々の「四民」が、本来の性と天に向かって努力するところの道德と倫理の教えを支えることになる。身分集団には、その職分を離れることなく、自己の義務を履行し、事態の本然に基づく実践を遂行することが求められるのである。神儒仏を融通無碍に参照し、人倫日用の学として展開される心学は、こうして、近世民衆の通俗道德をよく体現する思想となり、同時に民衆教化の学となったのである。

さて本論文は、こうした通俗的な石門心学に異論や新たな解釈を差し挟むもうとするものではない。むしろその通俗的な理解を、梅岩とその弟子たちのテキストを丁寧に読み解くことで、内在的な論理から再構成し、日本儒学の系譜のなかに内在的に位置づけることをめざすものである。その方法論にもとづくことで、いくつかの新たな知見をもたらしている。

そのひとつが、梅岩の『都鄙問答』（性理問答の段）における、「継ぐものは善」についての解釈である。梅岩は、『易経』で孔子がいうところの「一陰一陽之ヲ道ト謂フ。之ヲ継グ者ハ善也、之ヲ成ス者ハ性也」を参照する。これを読み解く梅岩の『都鄙問答』を、筆者は生命の連続継承を善とする自然観として捉える。事実、「継ぐものは善」は「生々」あるいは身体のもたれで説かれており、天理を体現するエージェントとしての個的存在の生命論的連続性という理解が根底にあることが明らかである。「継グ者ハ善」についての筆者の論証には説得力がある。

続いて、仁斎との差異化を論じた点にも筆者の工夫がある。古義堂・伊藤仁斎は華夷秩序にもとづく東アジアの儒教的伝統に対して、古学の実証的な方法論によって、天道論に対する人道論を精緻化し、人倫日用の学を創設した。それは近世〈日本〉のポジショナリティを構築することであり、儒学の〈日本化〉の一つとみることができる。仁斎の古学を

批判的に摂取した梅岩は、仁斎とは異なり、「天」という超越的存在との直接的な「貫通」を強調した。筆者は安丸良夫の梅岩論も参照しながら、エリートではない民衆の強烈な自己肯定のエネルギーをそこに見出している。いいかえれば、梅岩における超越者との合一性の強調は、身分的秩序から自らを引きはがし、自立するためにどれだけのエネルギーが必要であったかの例証だということになる。この論理は、梅岩における「神国」日本という境位の強調・前面化と軌を一にしている。

さらに、石門心学の行方を見定めるといふ企図にもとづいて、アイヌ民族に対する道話講話をおこなった西川晩翠の「心学道話」の翻刻を通して、師である梅岩とは異なり、世俗化と民衆教育の役割を積極的に担うことになった弟子たちの思想と実践を――そのパフォーマンスをも――提示したことにも工夫が現れている。以上の知見から、本研究は、石門心学の従来理解を進めているだけでなく、石門心学を知るための新たな入門編ともいふべきものといえる。

ただし、いくつかの点で課題が残っている。

審査委員全員から出された論点は、主要には著者の方法論をめぐるものであった。まず討論となったのは、著者が示す「儒学の近世日本における土着化、いわば「日本化」」という方法論的な視角である。ひとつの思想の営為の土着化が、ただちに通時代的な「日本化」という事態をもたらすわけではない。これは著者の心学研究が尾藤正英の日本思想史を考察の出発点においていることに由来する制約でもある。これについては、例えば朝鮮、中国、ベトナムなど東アジア・東南アジアの儒学との比較検討を踏まえて「日本化」の内容が語られなければならないだろう。著者は、そうした指摘に同意しつつ、今後の比較研究にもとづいて、「日本化」の内容を正確な理解へと深めたいという見通しを示した。

つづいて論点となったのは、これも方法論にかかわるが、心学を徂徠、仁斎など、古学の方法論から儒学の革命を遂行した近世日本思想史の頂点思想家と比して、「道話」という語り方に重点を置いたそのスタイルをどう理解するかということである。代表的な門弟の一人である中沢道二の語りを参照すれば、「道とはなんぞ、雀はちうちう、鳥はかあかあ」というように、大胆に世俗化した教説を展開した。これについて辻本雅史を踏まえれば、心学の革新性はその思想内容よりも、「道話」という語り口の確立にある。その場合、心学を、著者が展開したような思想的哲学的な探求の成果として評価するのは妥当かということになる。そのような観点から、高野秀晴は教化・教育の側面を重視した心学研究を提示し、心学は「学問であっても、一般的な儒学とは異」り、梅岩もまた儒者というよりは「儒教的思想家」として位置付けられる。こうした観点からの日本思想史研究は、儒学の形而上学的な議論よりも、テキストの普及や版本の広がり、人的ネットワークの展開を重視する今日の日本思想史研究の一つの方向性にも合致している。著者の方法論はこれとは異なり、心学をあくまで儒学の一形態として読むことにある。そこで安丸思想史を参照

することで、形而上学的な意味だけではなく、モラル・エコノミーや救済思想を重視する民衆思想史に近接させている。思想史研究そのものの存在意義を問うこうした争点の全体像については、博論執筆の段階で明確に意識されていたわけではない。ただし、最終試験の口頭試問においてそうした全体の見取り図を著者が理解し、今後の課題として確認するにいたったことは評価しておきたい。

加えて指摘されたのは、社会史研究からの問題提起として、身分論・身分的周縁論を踏まえた町人・商人論の概念規定、その社会関係的な把握が不可欠ではないかという指摘であった。おおまかな「民衆」という枠組みを疑わなかった尾藤正英や安丸良夫の思想史研究の段階では意識されなかったこの論点は、実は思想史研究そのものの課題である。しかしまたこの争点が学界レベルで明示的に議論されてきたわけではない。他方、思想・思想史という営為を社会構造や階級・階層構造に還元するのは、思想史研究が意識的に批判してきたことでもあった。それゆえ現在の課題は、思想史と社会史が協働して第三の道を模索することにある。その意味で、著者の博論を離れた大きな論点が議論されることになったが、これもまた著者は口頭試問のなかで、この大きな課題についても積極的に引き受けていくことを確認した。

以上の方法論をめぐる論点につづいて、テキスト上の解釈についても指摘しておきたいことがある。

西川晩翠との差異を見定める第四章において、梅岩晩年のテキスト『齊家論』から、「聖人の民を治め玉ふは、親の子を養育如く漸々を以て治め玉ふべし」を引用し、筆者は梅岩の「漸々」を「「継ぐものは善」という世代継承を前提とした漸進主義」とし、梅岩に対する晩翠の個人的修養の傾向を浮かびあがらせる。しかしこの一文は、世代継承というよりは、聖人による統治論を踏まえた親による子の教化・教育論の適用である。より正確に言えば、親・子の養育がモデルとなって、聖人・民の統治が実行されるという主張である。これは家族主義の治世論への適用であり、聖人による治世論としての儒学を大きく変更する破格の議論と見るべきではないだろうか。「継ぐものは善」の生命連続論と聖人・民、親・子の統治・教育を同じ次元に定位したと理解しても、同様のことがいえる。こうしたテキスト読解はさらに検討が必要ではなかっただろうか。

また、心学の思想運動のその内外における抗争についても指摘しておきたいことがある。石門心学が町人と商家の家族主義を核心として四民の人倫の思想を展開したことは、商品経済の進展と、小商品生産が支配的となった近世社会においても、身分制社会を批判する不穏さを備えた言説であったはずである。それゆえ梅岩は天心合一論や性理論といった超越論による理論武装を必要としたということもできる。石門心学は、「性」（梅岩）、「本心」（手島堵庵）、「道」（中沢道二）といったそれぞれのキー概念からアプローチすることで天理の道理に基礎づけられた職分論を展開したが、こうして構成された強固な倫理的

主体を、しかも士分の地位を脅かすことなく主張したわけである。著者の場合も、心学の予定調和性を強調するあまり、「お上」との対抗や内的な抗争関係についての目配りは弱くなっているように見えるが、梅岩と門弟たちの心学理解の差異に注目し、それぞれの政治性について問うことも、課題として残っているのではないだろうか。

こうしたことは、幕末の思想状況まで見渡したときによりはっきりするだろう。国学や水戸学は幕末の危機的状況に直面して、倫理的に立ち上げられた主体による激しい緊張と抗争を展開した。心学グループがそこでどういう位置を占めていたかという観点からの検討も必要である。

なお、提出された博士論文については、最終面接で研究史の再整理と手録本の翻刻の修正の必要性が指摘された。

以上、いくつかの課題は残しているものの、丁寧なテキスト読解と研究史の目配りにもとづく学術論文としての完成度をふまえて、船戸雅也氏の博士号授与は妥当であると審査員全員は一致して認めるものである。